

不知火の海に響く声

「蝶の雑記帳 123」

A. 石牟礼道子著『苦海浄土』

「蝶の雑記帳 122 話」に、渡辺京二さんの最後の著作を読んで考えたことを記した。その原稿ができたころのことだが、渡辺さんが亡くなったことを報じる記事の中に、編集者として石牟礼道子の創作活動の協力者であったこともたしか触れられていたと思う。あきれられるだろうが、それに触発されてやっとわたしは名高い『苦海浄土』を読んだ。そして、その著作を読むことの遅きに失したことを知った。読書人とは言えないわたしは、書物への目配りが足りなくて、『苦海浄土』という著作がどのような種類の作品かよく分かっていなかったのである。水俣病が話題になるときとり上げられる書き方から、ルポルタージュ的な性格の強い書物と思いこんでいたのである。

読んでわたしが感動したのはその文学性である。講談社文庫新装版の帯には、“魂”の声を書かせた「いのちの文学」と、書かれている。本の帯はたいてい本を売るために強い調子で書かれるけれども、この帯の文はけっして誇張ではない。初版から時が経って、小説『苦海浄土』のほんとうの評価が定着した感がある。この思索はそこから始めてみよう。

小説という語は古代の中国で用いられ始めたが、「小」と

いう文字にこめられていた軽侮は時代とともに薄れ、近代に至るころには散文の大きな可能性へ開かれた語になった。近代日本で小説という言葉を使うようになったときも同様である。軽い語感をただよわせるこの語が、今では、韻文以外の文学をほとんど全部覆うほどになっている。

『苦海浄土』の第一章はなだらかな調子で物語り始める。まもなくわたしという一人称が出てきて、物語るのが作者であることが分る。第一節のタイトルは「山中九平少年」、第二節は「細川一博士報告書」、第三節は「四十四号患者」と続く。水俣病の発見の状況を記述する文章と、著者が患者と会ってそのようすを書く文章が混ざり合って進む。この記述の仕方がルポルタージュのような印象を与えるのである。しかし、患者について石牟礼道子が日ごろ使う方言で物語る文章は、平凡ではなく人を引きつける力をもつ。立派な小説の文体である。そして、現実を目撃したことを記述する文章は、人間をよく見つめていて、石牟礼道子という人が優れた見者であることを示している。

ルポルタージュの側面があるものだから、小説を読んでいるのにわたしは折り目を入れた。今めくってみると、最初の折り目は第一章第四節「死旗」にある。水俣病患者を何度も目の当たりにした作者は、水俣病による死者たちの非業の死と生き残っている人たちのことを書き記す使命を、『史記』が手足を切り落とされた戚夫人とそれを命じた呂皇太后の

ことを記録した例を挙げた上で、表明する。「われわれの風土や、そこに生きる生命の根源に対して加えられた、そしてなお加えられつつある近代産業の所業はどのような人格としてとらえられねばならないか。独占資本のあくなき搾取のひとつの形態といえ、こと足りてしまうか知れぬが、私の故郷にいまだに立ち迷っている死霊や精霊の言葉を階級の原因と心得ている私は、私のアニミズムとプレアニミズムを調合して、近代への呪術師とならねばならぬ」、と。ここには、作家がどういう心性の人であるか、そこからどのような決意をもって文章をつくっていくかが表明されている。

この書物は、初め同人誌などに書かれ、渡辺京二編集の「熊本風土記」に連載されてしだいに形を成したようだ。のちに大作になったこの作品は時間をかけて質実を向上させられた、と考えてよいのだろう。わたしは読み進んだとき文章からかすかにそう感じた。しかし、当初書き始められたのは、完成稿『苦海浄土』で第三章になった「ゆき女きき書」だという。わたしが感動したのはこの章からのたぐいまれな文章である。すると、最初の稿の書き方がどんなものだったか知らないが、『苦海浄土』の芯になる文章はすでに出来始めていたと考えなければいけない。

1968年暮れの「あとがき」には、先ほど引用した文章と同じ趣旨の文が書かれている。そこには、水俣病患者に対する原因企業の罪悪感のなさへの憤りが表明され、「死霊あるい

は生霊たちの言葉」を吐く患者の発言が引用されて、水俣病に対する姿勢は揺らいでいない。そして、「ここに登場する人びとはその意味のみならず、この国の農漁民の、つまりわたくしたちの、祖像であり、ひとびとの魂には、わたくしたち自身のはるかな原思想が韻々と宿されている」と、心の底にある思いが「魂」という言葉で表現される。超越をいましめるわたしは、宗教に付随して用いられる魂という言葉なるべく使わないようにしているけれども、ここでは石牟礼道子の用いる魂という言葉に敬意を払おう。

第六章第二節「わが故郷と〈会社〉の歴史」で、石牟礼という人の魂がどのように形成されたかを窺い知ることができる。まだ多くの言葉を使えない幼いころ、めくらで脳を病んでいた祖母と二人で過ごすことの多かった人は、人が生きるとはどういうことかを身と心で体験しながら成長したのである（そのことは、大きな歴史の流れのなかに埋まるエピソードの断片として書き入れてある）。石牟礼道子の魂はそうやってつくられ多感な成長期へ引き継がれていったのである。それを身心の活動体・うごめきとすることができる。若いころには未遂に終わった自殺を試みたこともあったという。人間の「魂」・身心の根源的な活動体は制御がむずかしいほどのものなのだ。

そういう活動体である作家は、著述しようとする対象の水俣病の淵源までさかのぼろうとする。探求は、なぜ郷土不

知火海沿岸部に水俣病が発生したか、水俣という土地の歴史に向かい、土地柄の説明を藩政期の文献の引用で始めて、開明的なその土地に窒素肥料会社という会社が設立された経緯を要領よく記述する。空気中の窒素を化合物に固定するイノベーションを語り逃さず、植民地朝鮮半島に設立された会社の置かれた漁村湖南里の「住民はどこへ行ったのだろうか」と鋭く問う。ここには作家の知性が現われて、続けて言う、—— 海辺の部落が消失したことはたしかである。数々の里が朝鮮でうしなわれ、そこにいた人びとの民族的呪詛が死に替わり死に替わりして生きつづけていることをわたしは知っている。この国の炭坑や、強制収容所やヒロシマやナガサキなどで。この列島の、結節点の病の中に。そのような病はまた、生まれてくるわたしの年月の中にある——。見者石牟礼道子は、水俣の悲劇を世界の歴史の中において見る。

その追及は、日本国の近代化という歴史、また、人類の長い工業化の歴史 —— 光と闇とに分けることのできない表裏一体の人間の営為 —— に対する異議申し立てへと向かわざるをえない。根源的な魂は、そこまで、結局のところ人間の生そのものまで問いつめようとする。『苦海浄土』は単なるルポルタージュではなく、人間の根源まで描こうとする思索的小説、と言うことさえ可能である。小説のその可能性が実際によく整えられた作品にまで高められている、とまで言う自信はわたしにはないけれども。

たしかに言えるのは、わたしが感動したのが第三章「ゆき女きき書」と第四章「天の魚」だということである。渡辺京二がそれを読んだ時「傑作」だと確信した、と文庫本に寄せた文「石牟礼道子の世界」に書いているからではない。渡辺が、「目が開いていれば誰にもわかる」と言う通りである。その文は、石牟礼道子は患者のそれぞれの家を一度か二度しか訪ねなかった、そこで記録などしなかった、と教える。

それでは、あの人の心を揺さぶる文章はどのようにして生まれたのだろうか。先ほどわずかに触れたが、幼いころから育まれた他の人にはない特別の「魂」が、会って話した人の身心のうごめきつまり「魂」を感じとって、自身の琴線にのせて語ったのだ、とわたしは思う。超越的な霊や魂という言葉を使いたくない哲学的な立場のわたしも、石牟礼道子という稀有な語り部を得て、水俣病にかかり不知火の海で漁をする話者は、その生業の喜びをもう一度朗々と表現することができた、と敢えてそう表現しておく。それが傑作を生む小説家の力量である。しかしわたしには、「ゆき女きき書」や「天の魚」の、心に響いてきて身を委ねさせるような感動を与えるあの文章を、美しいと形容するのはためられる。それは安らぎともちがうだろう。尊厳という言葉も似つかわしくないうと思う。トルストイは、近代になって多用されるようになった「美しい」という言葉に疑念をもった。かといって、『苦海浄土』は、晩年キリスト教に回帰したトルストイが説いたような「善」を描いているのでもない。

なんと表現すればよいのだろうか。石牟礼道子という人間の内部で起きたことは、わたしに理解できない複雑なものだった、と考えざるをえない。先ほど触れた渡辺京二の解説は、心を揺さぶる「ゆき女きき書」や「天の魚」の文章について、「苦悩と絶望の深さゆえ、彼らにとって“苦海”は“浄土”になった」、と表現している。これは作品批評として適格だと思う。そこには、「この世の苦悩と分裂の深さは、彼らに幻視者の眼を与える。苦海が浄土となる逆説はそこに成立する」という指摘もある。

「苦海」と「浄土」という言葉は対立し、二つの言葉の接続は逆説としてしか成立しない。それを石牟礼道子は敢えて行なったのである。渡辺京二編集の雑誌での原題は『海と空のあいだに』であったという。それが講談社から出版される時『苦海浄土』に変わった。第一章の扉のタイトルの下には、「繫がぬ沖の捨て小舟 生死の苦海果てもなし」という文字が添えられている。インターネットで探したら、それは「弘法大師和讃」中の語句だという。その探索は、この和讃の言葉を石牟礼道子の小説につなぎ合わせる思索が多いことを教えてくれた。曰く、物語の意味をこの二行が見事に言い表している、石牟礼道子さんの体から生まれる言霊にはエネルギーが、…、西日本新聞の社説に「魚の精霊」、……。

この小説を読む前から表題が仏教用語らしい「苦海浄土」

であることがいぶかしかったが、読み終わって、小説に仏教思想はあらわには現われていない、とわたしは思った。日本の社会で日本語を話していれば、その思想の中に仏教的なものがあってもおかしくない。しかし、考え深い作家はそれが直接顔を出すようなことはしない。ところがインターネットは、少なくない人が、その表題に誘われて、この小説に通俗的であいまいな仏教的理解を適用していることを教える。

しかし、最近哲学と宗教について思索しているわたしは、その理解は深くないと思う。日本人は宗教について真剣に考えることが少なく、日常生活と習俗で出会う宗教的な言葉を表層でしか受けとめていないのではないか。わたしは、「弘法大師和讃」を読んでみた。この和讃は弘法大師を“遍照尊”と称える讃歌であり、仏教の真髄をそれほど深く説いているのではない。添えられた二句に自分の聞き知っている仏教理解を交えて、小説『苦海浄土』を解釈するのは勧められない。書物を理解する鉄則は、まず、字句・文章が表現していることを離れずに書かれている内容を受けとめることである。

けれども、自分の小説に四文字の造語「苦海浄土」を冠した石牟礼道子の心裏にあったものをいろいろ考えることは許されるだろう。「浄土」という言葉は浄土三部經に説かれた思想である。「苦海」の方は仏教に共通する考え方である。短い「弘法大師和讃」の当該の箇所は、「悪業深きわれわれは 繫がぬ沖の捨て小舟 生死の苦海果てもなし」と言って、

“遍照尊”によってしか救われることはないと示唆するだけで、人が浄土に生まれる契機を示しはしない。浄土教と密教は仏教諸經典のなかでも相当隔たった思想だ、とわたしは思う。だから、石牟礼道子が“苦海浄土”を描く小説の第一章の扉になぜ「弘法大師和讃」の語句を添えたかが今一つ分からない。「苦海」と「浄土」という言葉は対立したまそこに置かれている、としか思えない。

ところが、次節で採りあげる緒方正人のことを調べているとき、びっくりすることを知った。熊本市にある浄土真宗大谷派の真宗寺に、2022年に石牟礼道子の墓が立てられ、その墓石には自筆の「夢劫」という法名が刻まれているのである。脇の石碑が、石牟礼道子が1987年にこの寺で得度してこの法名を授けられたことを教える。この人が『苦海浄土』を書きころから仏教に関心を寄せていただろうこと、晩年には真宗寺で得度し仏教への帰依に至ったことを知る。小説『苦海浄土』一冊しか読まず晩年の著作を読んだことのないわたしには、この人の心の内がほんとうには分からない。この人の心の動きつまり“魂”はどんな軌跡を描いたのだろうか。

B. 緒方正人著『チッソは私であった』

『苦海浄土』を読んで間もないころ、社会思想家斎藤幸平の著書『ぼくはウーバーで捻挫し、山でシカと闘い、水俣で泣いた』を読んだ。期待を寄せる若い学者は身を挺して社会の出来事を涉猟するのだが、水俣のことを書くところで、一冊の書物の名をわたしに教えてくれた。緒方正人という人の著書『チッソは私であった』である。斎藤幸平の鑑識眼はたしかである。おかげで、水俣病という悲惨な出来事についてもう一つ重要な書物を読むことになった。

この書物は、水俣病を患者として痛切に引き受けた人が、苦闘したこと、さらにその苦悩を突き抜けて一つの覚悟にまで至ったことを、書いている。そこに記された心境の進展に、わたしは感嘆した。この第二節ではそのことをつづろう。

『チッソは私であった』は生い立ちから語り始める。緒方正人という人は、たくさんの兄弟姉妹の末っ子として水俣の北にある芦北町に生まれた。父親や重症の水俣病で亡くなり、甥や姪は胎児性水俣病で、自分も含めて兄弟姉妹に有機水銀の中毒症が現われたという。本人は中学校を卒業して一年ぐらいすると家出をしたそう。それは気性の激しさの表われだったのだろう。熊本で困っているところを暴力団関係の人に拾われて運転助手などをして暮らしていたとき、デモ行進に突っかって行って逮捕されたことなどを語っている。そのとき鑑別所で諭されて故郷に帰ることになったのだとい

う。「家出から“運動”へ」と題したこの書き出しの章で、親父の仇を討とうとする気持ちがずっとあったから、故郷に帰ると水俣病患者の運動にかかわることになったと、この人の遍歴の始まりが告げられる。

ところで、この書物は、聴衆に話しかける言葉づかいで書かれているが、何度かの会合での講演などをまとめて一冊の書物になったのではないかと推測される。波が押し寄せては引いて、またそれを繰り返すように語られて、重複するところが多い。作家活動の訓練をしながら小説をものしていった石牟礼道子の傑作『苦海浄土』とは異なる種類の書物なのである。『苦海浄土』が、見者として、水俣病の発生源である側への根源的な異議申し立てをしながら、患者たちの身心の活動体“魂”を描き切ろうとするのに対して、緒方正人の書物は、根源的な異議申し立てをする点では同じだけれども、自らが水俣病の患者である行動者として“魂”の遍歴を語ろうとする。

今言ったように反復するところの多い語りをうまく整理して記すことがわたしにはむずかしい。重複を恐れずに目にとまった言葉をつづっていくことにする。そうすれば、語り部の心の中で、語ってはしだいに形をなし、それが次の語りのときにまとまりのある思想に成長していくようすを知ることができるかもしれない。

第二章のタイトルは「チッソは私である」で、いきなりこの書物の核心が語られる。語りを記述文にするのは言葉にこめられている気持ちを削ぎ落すことになるけれども、簡潔にするために箇条書きにしていく。

- * 二十歳のとき水俣病患者の認定申請運動に参加。県議会議員のニセ患者発言への抗議行動で逮捕。
- * 十年以上の闘いの中で疑問が起きた。チッソが加害者といえながら、チッソの姿が自分に見えない。チッソから本当の詫びの言葉をついに聞くことはなかった。
- * 要するに構造的な水俣病事件と言われる責任というのが、結局はシステムの責任ですね。人間の責任という一番大事なものが抜け落ちている。責任というのが制度化されている。人間に会いたかった。
- * 十二年間やってきてずっと抱いていた疑問が大きくなった。水俣の事件で失われていったものを逆に見なおすようになった。どうやら人の人に対する罪だけではないということに気づいた。
- * 私は認定申請を取り下げた。自分がチッソの一労働者であったとしたらと考えると、同じことをしなかったとはいいい切れない。立場を逆転して考えることは今までなかった。責任を追及している間は恐ろしくはない。ところが、逆転を想像するだけで、立場がぐらぐらとする。
- * チッソとはもう一人の自分だった。責任そのものが制度化されていた。もうこれは水俣病だけではないと思った。日

本の社会のさまざまな問題が制度化されていると思う。

- * 運動の戦列を離れて一人になった。そのあと、自分でもどうにもならないと感じた三かか月三ヶ月ぐらいの期間があった。その間私は狂いに狂った。
- * 「制度が人間を閉じこめた」。なぜか世の中は、問題が起きるとそれを処理する仕組みを作ることだけに懸命になる。すると、「仕組みの中に個が隠れる」。

ここからは、石牟礼道子とその小説で文学的に表現したことを、家族が重症患者でかつ自分も症状のある人が患者の立場から、——考え続けるなかで言葉が整理されたと思われるが——自分の言葉で語る内容なので、できるだけ元の表現を損なわないようにしよう。

- * （わたしは）「命の記憶をとり戻すために」考えてきました。胎児性水俣病の子が生まれても、二人目三人目と産み育てていく。毒を背負って生まれてくる子も受けとめ、抱いていくという生き方は、命に対する向かい合い方、姿勢をものすごく深く教えている気がします。
- * 魚を毎日獲って、それで自分たちが生きながらえる。魚によって、海によって養われている。一年に二三遍は鶏も絞めて食って、あるいは何年かに一遍は山兎でも捕まえて食っている。そういう生き物を殺して食べて生きている、生かされているという暮らしの中で、殺生の罪深さを知っていたんじゃないかと思います。このことがなによりも加害

者たちと違うところです。

- * （水俣病で苦しんだ人たちは）その苦闘のなかにものすごい振幅があったから、命への向かい方がより本源的といえますか、根源的といえますか、人間的だったんだと思うわけですか。ですから、今だから核心を持っていうわけですが、すけれども、裁判闘争だ水俣美容闘争だと力まなくなつて、人間としての格から言えば最初からこっちの方が勝つたんだと、わたしは確信をもってそう思います。
- * そのような水俣の漁民や被害者たちの精神世界からの呼びかけこそ、闘いの最も肝心なところではなかったのか。つまり、命の尊さ、命の連なる世界と一緒に生きて遺構という呼びかけが、水俣病事件の問いの核心ではないかと思っています。その問いは決して加害者たちだけに向けられたものではなくて、それこそあらゆる方向に発せられていると思います。
- * すでに歴史的な事実として加害者対被害者の構造はありますが、お話ししてきたように私は今、事の本質がそこにあるとは思っていません。

さらに、「魂のゆくえ」や「人間の生と死」へと自己省察は深まっていく。

- * 狂っている最中で「おやじ、魂を受けとったぞ」という声を出しました。生まれてはじめて、そういう声を自分から発した。… 三十二歳になってやっと一人歩きを始めたよ

うな気がします。

- * 水俣病事件氏の中で亡くなった人、あるいは魚、猫、鳥、傷つき倒れ殺されていったそういう命の問いかけていることは、亡くなった人の救いということだけではなくて、実は生きている私たちにかけられた願いだと思うわけです。
- * 私は、今、水俣病患者として水俣病を語っているわけでもなくて、水俣病患者として生きているわけでもありません。私の願いは、人として行きたい、一人の「個」になりたいというこの一点だけです。私もいまだに救済を求めています。命のつながる世界に生きているという意味で、…。

この章最後の段落は、「生き抜くこと、死に切ること」という表題で語られる。

- * 生きるということ、これはまあほとんどの人がやるけれども、私はもうひとつ、生きるというか、生き抜くそして死に切るといえるのは大事なことだなあと感じます。
- * 何よりこの世に生まれて、行かされて、生きて、生き抜いて、そして、見事に死に切りたいですね。

この章以後にも目にとまる言葉があるけれども、ここまでの箇条書きでおおよそ緒方正人の思想の核心を知ることができると思うので、これ以上文章をなぞって書き写すことはやめよう。それではわたしが考える仕事が抜けてしまう。

上の少なくない箇条書きはみな味わうに値する価値を持ち、さらに思索を深めることのできる種子を含んでいる、と思う。けれども、それについてわたしが軽々しく文を書きつけるとやけどを負う恐れがある。“公案”として掲げておいで修養に努めることにしよう。

一つ言えることは、緒方正人の書物『チッソは私であった』は、石牟礼道子の小説『苦海浄土』に対する優れた註釈である、ということである。そうは言っても、『チッソは私であった』は、もちろん、単なる註釈書ではない。独立した内容をもつ書物であり、わたしは多くのことをそこから学んだ。

客観的に見れば、緒方正人は石牟礼道子よりずっと年少で、交流が深まるにつれて、石牟礼道子から大きなものを受けとったと考えられる。考え方語り方にもその影響はあるのだろう。でも、緒方正人の思想は独力で形成されたと考えるのが公平だろう。緒方正人の思想は、どれだけ高等教育を受けたかを重要視するいわゆる学歴主義をしり目に、それを超える格を具えている。人が真剣に考え学ぶことが人間をつくることを示している、と思う。わたしにこんなことをいうほどの資格はないが、言わずにはおれない。

最後に、上の箇条書きが湛えている宗教的な響きについて触れておこう。わたしは父母が熱心な浄土真宗（本願寺派）の信徒だった家庭で育ったので、人よりもよけいにその響きを聴き取っただろうと思う。前小節（a）のおしまいのとこ

ろで、晩年の石牟礼道子が浄土真宗（大谷派）の寺で得度したことに触れたが、それは、緒方正人がどのような場でそれを語ったかを知りたくて、インターネットで検索して知ったのであった。それによれば、緒方正人はその寺で語る場を得たと推測される。石牟礼道子も緒方正人もその寺にかかわっていたのである。渡辺京二の葬儀もその寺でとりおこなわれたらしい。

石牟礼道子と緒方正人は「本願の会」という小さな団体を作っていえば「同行」として考え行動したのだ。緒方正人は石仏を作ったりしたらしい（余計なことだが、浄土真宗本願寺派勧学の博士から教えを聞いていた父母は仏像を崇拝することをしなかった）。ただし、それを二つの書物の評価に関係づけてはいけな

い。わたしが興味深いのは、緒方正人が「魂」という言葉を子どものころから聞いて育ったということである。母親だけでなくその人々から聞いたようで、不知火海沿岸地方では人々が通常使う語彙の「魂」という言葉が生きて使われていた、ということである（わたしの父母が魂という言葉を使った記憶はない）。だから、二つの書物に現われる魂という言葉はそういう語彙として用いられている、と考えなければならない。上でわたしが「魂」を人の心の活動体のように言い表わしたのは、そういう事情も表現したかったのである。そういう古い時代から人々が身につけていた「身心の活動」の声が、現代まで不知火の海に響いていた、とわたしは感じるのである。

註：わたしの宗教に対する考え方は、電子書籍（ペーパーバック）
『科学的認識論の構成 と「正法眼蔵」批判』に記している。

2023 年 8 月処暑

海蝶 谷川修